

2013年10月1日

学長 尾池和夫

教職員総会所信

京都瓜生山のキャンパスの教職員の皆さま、また、同時中継でご参加の東京外苑キャンパスの皆さま、お集まりいただきありがとうございます。ロゴマークのPANTONE286Cの青が、秋の空に呼応する季節になりました。

教職員総会にあたって私の考えをお伝えし、皆さまのご理解とご協力、またご批判をいただきたく存じます。

4月1日以来、さまざまの場面で多くの方々に出会い、議論し、ご教示をいただきました。感謝するとともに、皆さま方の教育と研究と社会貢献に注ぎ込む深い情熱と磨かれた技に、しばしば感銘することがありました。

その間、多くの場所で、多くの方々に、その場での感想を申し上げ、ときには改善のための意見もお伝えしました。今日は、この半年の経験から得られたことをもとに、私の考えを申し述べる次第です。

学長に就任して半年、2つの視点で本学を見てきました。視点の第1は、本学設立の理念であります。1976年に発表された「まだ見ぬわかものたちに一瓜生山学園設立の趣旨一」、2000年4月「京都文藝復興」、2007年1月、設立30周年に際して新たな30年の展望と目標を明示した「藝術立国一平和を希求する大学をめざして」であります。これは、2012年10月、「文明哲学研究所 設立の宣言一核廃絶と世界平和のために」に発展しました。基本理念を明示した「藝術立国の碑」が、今年5月13日の日付で本学に建立され、また東北芸術工科大学にも建立されて、私もそれぞれ5月31日と7月9日の除幕式に参加しました。

本学を見る第2の視点は、2000年に公表された本学の自己評価です。下記のようなことが書かれています。

「今後も社会の要請に応え、更なる教育研究組織の充実をはかるため、必要に応じ教育研究組織の改組や規模の変更を行なっていく。(略) 教養教育の運営組織についても常に教育効果の点検を行い、学生の動向や社会のニーズを踏まえた上で、よりよい体制作りを目指す。教育研究組織の意思決定についてはそのプロセス自体に問題はないが、学習者の要求を汲み上げる仕組みを組織的に整備し、意思決定に反映できる仕組みを実現する。」

これは本学の公約であり、皆さまがご承知のように、これらの公約は着々と実行に移されている最中であります。

また、自己評価の中で整備の必要ないいくつかの点について言及されていますが、その中で「学長不在時にも副学長が学長代行者として機能することで、遅滞なく意思決定を行なうことができおり、現状の意思決定組織の構成に問題はないと考える」という、学長に関連して、やや言い訳のように聞こえる表現が気になりました。

その他、次のようなことが書いてあります。

学生の要望を定期的、数値的に把握する仕組みが整えられていない。

今後は入学前から卒業まで、一貫した視点による学習支援や学生サービスを提供できるよう、多様化する学生に対応する。

東北芸術工科大学の掲げる「東北ルネサンス」と呼応し、合同事業など具体的な協働活動を実施する。

医療や福祉分野とのコラボレーションを進め、社会が抱える問題解決への貢献をめざす。

このような自己評価に対して、財団法人日本高等教育評価機構による認証評価の中では、「総じて、芸術大学としてふさわしい学科、専攻を構成し、建学の精神に基づいた特色ある教育研究を行っている」とした上で、いくつかの重要な指摘がありました。教授会の開催が定期的でなく欠席者が多いこと、教授会、代表教授会などの関連が明確でないこと、耐震が未整備な建物への早急な対応が必要なことなどが指摘されています。

これらの中の多くのことが、すでに改善に向けて、あるいは計画の実現に向かって進められています。

さて、ここまでが前置きであります。これからが私のメッセージです。

お話ししたい第1のことは、教育と研究のことです。

昨日の報道によると、今春実施の大学入試で98大学が問題の作成を予備校や受験関連

企業に委託していたということが文部科学省の調査で分かりました。実に私立大の6大学に1大学が外注していたということです。大学には理念に基づいて示すアドミッションポリシーがあり、それが入学試験に反映されるものです。本学においては、理念を守るために、入試問題を外注するような事態を招かないよう、教育と研究の条件を守っていくことが重要と考えています。

本学では今、学生のキャリア教育に関して熱心な取り組みが行われており、その一環としてのFD研修などの事業が行われています。キャリア教育という場合の「教育」という言葉は、教職員主体の言葉であり、学生の立場に立てば、これは「キャリア学習」というべきものです。教え育てるという他動詞による表現ではなく、自ら学び習うという自動詞で認識してもらわなければなりません。自ら考える多様な学生に応える教育体制を充実することによって、少しでも途中で挫折する学生をなくすことが必要です。

キャリア教育という言葉が、そもそも日本で広く使われるようになったのは、1970年代初頭のアメリカで、中等教育改革、つまり普通教育と職業教育の統合の一環で導入されたキャリア・エデュケーション（career education）が翻訳されたことに始まりました。現在そのアメリカでは若者の就職活動に両親が深入りする問題が発生しており、日本でもその発生は時間の問題と指摘する専門家もいます。

教育の技術を身につけるのは、もちろん重要ですが、私たちが心得ていなければならないのは、キャリア教育で何を学生に学習してもらおうかという基本的な視点です。それは学生一人ひとりが、自分を中心として4次元の目を持つということと、その4次元空間を広げる能力を持つということです。私たちは4次元空間にいますが、水平面の2次元は比較的自由に移動できるのに比べて鉛直方向は困難で、さらに時間軸での移動は大変難しい課題です。キャリア学習の重要な視点はそこにあります。時間軸に沿って自分の過去を正しく評価して認識し、現在の自己を把握し、自分の未来を想像する能力を養い、その能力を思い切り伸ばして、豊かな想像をしつつ、それを創造へと移して行こうとすることに主眼があります。未来に向かって広く、世界で、あるいは宇宙で活躍する自分をデザインするということです。近い将来のプロフェッショナル科目の導入もそこに目標があります。そのためには、外から講師を呼んで教育するのではなく、内部の教職員がまず基本をしっかりと認識して、自らを把握し、現在の若者の状況を把握した上で、教育にあたらなければならないと思います。

学生たちは高い授業料を払って本学に通っています。それは本学に対する投資でもあります。それに対してしっかりと配当する大学であることが必要で、本学の教育全体を通してそれが実感してもらえるよう、教育の資質を高めて行くことが重要です。優れた教員を確保し、その研究環境を整えることが、結局は多様な学生の要望に応える道であり、他に便法はありません。

これに関連して、学生の中途退学の実態を把握する必要があります。「多様な学生」と繰り返しましたが、学生の要望が多様なのは当然であり、それが活かされてこそ本学の特色が輝くのだと思います。そのためには失望して去って行く学生を放置してはいけません。ある調査によれば途中で学生が去って行く理由の多くが経済的理由となっているが、よく聞き取りをすると本当の理由は他にあるということがわかるそうです。学生の一人ひとりが学習意欲をなくすようなことにならないよう、学生の周りに起こっている、どんな些細なことでも、気づいたことを私に、あるいは役員室の誰かに早く伝えてほしいと思います。

第2は、デザインのことです。デザインはすべての感覚に関連します。デザインは、まず機能的でなければならないと私はよく言っています。毎日の仕事に差し支えるデザインはよくないと思います。しかし、場合によっては、現在の社会に一石を投じるようなデザインも必要です。最近出会った物差しに、素数だけの目盛りの物差しがあり、実に不便であると思いますが、その物差しによって心和むものがありました。

本学の教室を使って最初に愕然とするのが折りたたみ式パイプ椅子があまりにも氾濫していることです。片付けても広く場所をとり、倒れることが多く、運ぶのには大きな台車が必要と扱いにくい品物です。それに比べてスタッキングするパイプ椅子なら、何の苦労もなく狭い場所に収納できます。第1に座り心地がちがいます。

椅子は一例ですが、デザインは本学の主要な分野です。教室の設計の細部にもその専門性を活かしてほしいということです。

物だけでなくデザインは言葉の使い方にもあります。職員の方たちが私を見ると必ずと言ってよいほど、「お疲れさまです」と挨拶します。確かにつかれた顔かもしれませんが、早朝に発信されたメールにも「お疲れ様です」から始まるのがあり、「まだ疲れてません」と返したことが何度かあります。挨拶はその場に合った言葉にすることも、言葉のデザインだということができると思います。

第3は、学生と教職員の安全と健康を守ることです。

先日の台風18号では、水害の激しかった地域の79名の方々に問い合わせ、学生の実家の工場に浸水したという被害があることがわかりました。学内では食堂周辺の浸水がありました。

何よりも大切なことは学生が安全に学習できる環境を整備することです。本学では弱い建物を順次改修し、よりよい学習環境を実現する努力を続けています。また、4月に約束したように、花折断層を歩いて見学し、理解を深める学習会を、学生が中心となって企画してくれており、蒼山会にも同様の企画を提案しているところです。そのようなことから始めて、花折断層の実態を理解し、活断層と正しくつきあうことを学ぶ機会を作っていきたいと思っています。

化学物質の毒性をきちんと把握しておいて利用することも重要です。青木先生と相談して、画材の安全情報をわかりやすく伝える手法を研究する研究計画を練っているところです。

生活習慣を分析して自ら健康を意識することも重要です。学生との朝食会を3回実施した結果を活かして、学食で朝食のメニューを開発していただきました。朝食をとって授業に臨むと明らかに効率よく学習ができたという経験が3回の朝食会の成果でした。

第4は、聞き取りやすい機材の整備をということ、聞くという感覚についてです。

全体的な印象として、本学のスピーカシステムが場所によって合っていないということを気にしています。例えば瓜生館で文明哲学研究所の会議を行いました。せっかく一般公開したのに、聞き取りにくかったという声を聞きました。原因は壁に反響してハウリングを起こしやすいのと、エアコンの防音工事ができていないことによると判断しました。マイクとスピーカシステムに関しては、タイムドメインのスピーカを買い、現在それを関係者に体験してもらっているところです。私の部屋に今、TIMEDOMAIN11が置いてあり、スマートホンなどの音源を持って学長室に来て頂ければ、すぐ試聴できるようになります。ぜひ試していただきたいと思います。

スピーチがまったく聞き取れなかったという声は、同じようにギャルリオーブでのパーティで経験しました。そこでもTIMEDOMAIN11で実験し、隅々まで聞き取れるようにな

ることを確認しました。

瓜生館の防音工事については、事務局にすでに検討してもらっています。これは常駐する職員の職場環境の課題であり、早急に改善が必要と判断したものです。

第5は、学生の活躍の成果と広報のことです。

JTの依頼で喫煙室の椅子をデザインする機会があり、学生さんたちに、たいへんよい椅子とテーブルを北山杉の間伐材で制作してもらいました。すでに納入して好評ですが、これを私はぜひ商品化してほしいと関係者にお願いしました。そうすることによって学生たちの実践の成果が世の中に残っていくと考えるからであります。

これに関連して、大学の中の一般の方たちが立ち寄れる場所に、ユニバーシティショップを置きたいと思います。また、全学が美術館という考えに立てば、ミュージアムショップと呼んでもいいと思います。これは、学長からプロジェクトセンターに連携開発の申し入れをしてもいいと思っています。

広報誌の「瓜生通信」は年に3回、合計3万部が発行されています。たいへん好評ですが、私はこれを卒業生が全員受け取れるように工夫してほしいと願っています。また、たまには一般の書店で販売する本として、「瓜生通信特集号」のような企画を実現してほしいと思います。全国の書店で平積みして売ってくれるようなすばらしい特集号が組めるような大学であると、私はこの半年で確信するようになりました。

私は本学のことを語るときに、「京都造形芸術大学は、3歳から94歳まで、8500名の学生、さまざまな分野を見渡している1000名の教員、学生や教員と一体となって活動の推進を支援する500名の職員、合計して約10000名の学生と教職員が芸術立国を目指している、そのような大学であります」と表現するようになりました。

この表現は、こども芸術大学設立の宣言「母なる大地の回復を願って」に、「いかにして新しい生命に対する深い愛情を取り戻し、私たちの心の中に『母なる大地』を回復するか。人類の未来はこの一点にかかっているのです」とあることによります。活動のフィールドである瓜生山に生息するたくさんの動物や自然を思う、そのような生活の積み重ねが、「こども芸術大学」の活動の基軸となっているのです。

この考え方を、大学にも大学院の課程にも、さらには芸術活動や産学連携などを通じて

の社会貢献にも、常に基本として持って臨むということが重要であると思ったからであります。

このようなことが、私のこの半年の学習であるということをお伝えして、私の所信の表明に代えたいと思います。皆さま、本当に今日一日、お疲れ様でした。

ご静聴、ありがとうございました。

尾池和夫